
豆田豆雄2011

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

豆田豆雄2011

【コード】

N9835U

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

これも実験的な作品。最近、実験が多いな！。

豆雄はプロ作家になりたかった。どうしてもなりたかった。

豆雄が勤務先の会社で会議をしてる時、ケータイが震えた。

「ちよつと失礼」

豆雄は廊下に出た。

「もしもし」

妻からだった。帰りに大根を買って来いと。大根を二本買ってこいと。

「ふふふ。大根かあ。大根かあ」

会議のあと、小久保課長が、書類の手直しを豆雄に命じた。

「きちんとやってくれたまえよ」

「課長がやりなさいよ」

「生意気言つと陰湿な手口でいじめるよ」

「ふん。ひどいこと言つなあ。わかりましたよ」

「それと、上司に対して、あんまりなめた口叩いてると殺しますよ」

「うるさい黙れ」

「お前こそ黙れ」

ゆえに残業であつた。

ざああああああああ。

「今日、傘持ってきてないな……」

仮眠室で、テレビを見ながら、そう言えば、ミスター山つぴいの番組いつの間にか終わってしまったなあとと思う。確かにあの番組は少しマニアックだった。けど、豆雄は好きだった。

豆雄の妻節子は、その頃、家で、勉強をしていた。資格をとろうとしてるのだ。

お茶を飲む。最近売れてるお茶だ。

ざああああああ。

そう言えば、ミスター山っぴいの番組終わっちゃったなあ。
とふと思う。

ざああああああ。

節子もマニアックな性格だったので、山っぴいが好きだった。
ちなみに山っぴいは独身である。三回離婚している。人間として失
格だが、しかし、芸人としては一流である。

ある日、雨の日、豆雄は、店でカレーライスを食べていた。

ざああああああああ。

「このカレーむちゃうまいな。むしゃむしゃ」

ざああああああああ。

豆雄の弟、克也は、プリン市内に住んでいた。35歳であるに関わ
らずアルバイトであった。情けないことである。35歳ともなれば
正社員じゃなきゃいけない。人間のクズだ。

克也は自殺を考えていた。

踏切の前に立ってじっとしてる。

「しかし、プロ作家になるまでは死ねない……」

苦しい時期である。本当に地獄のように苦しい日々である。自衛官
より苦しい。アルバイトでは生活が苦しいし、社員雇用は難しい。

そして、小説の世界はさらに難しい。

自殺を考えるのも無理はない。もうどうしていいかわからないのだ。

克也は、公園のベンチに寝転んだ。

寝ながら、昨日食べた冷やし中華のことを思い出す。

ざああああああああ。

雨が降ってきたので、克也はあわてて、ホームレスのおっちゃんに頼んで、テントに入れてもらった。

「ねこの焼肉食うかい？」

「うげえ。おいしいのかい？」

「旨いぜ」

豆雄は、ある休日、妻節子と地元の遊園地たけしランドに来ていた。

その途中、雨が降った。

ざああああああああああああ。

「豆ちゃん！」

「あっ節子」

節子が転んだ。

ざああああああああああああ。

克也は久しぶりに解離性アイデンティティー障害、いわゆる多重人格にかかった。引きこもりの時以来だ。

仕事をするのが不可能になり、生活保護で生活することになった。

克也は悲しかった。バリバリ、プロ作家として働きたかった。情けないと思った。

克也は、ある日、隣の部屋で、老人たちがカラオケをしていたので、ドアチャイムを鳴らした。

しばらく口論になり、最終的に克也は老人たちを包丁で刺した。

その後、裁判になったが、老人たちに非があるとして克也は無罪となった。

無罪が決まった日、雨が降っていた。

ざああああああああ。

克也は、なかなか働くことができなかった。どうしても身体が言うことを聞かなかった。

克也は、畳の上に寝転びながら、昔好きだった子のことを思い出す。

「ロリ華ちゃん。むにゃむにゃ」

ざああああああああ。

豆雄は、ついに念願のプロ作家になった。社員をしながら、雑誌に書き始めた。いわば、兼業作家である。

「お尻くん」である。映画化も決まった。

妻節子は、その頃、ニューヨークに住んでいた。ダンスの資格をとったあと、移住したのである。

節子がダンスのレッスンをしているとき、雨が降った。

ざああああああああ。

豆雄は課長になった。仕事が増え、ストレスが増えた。

部下の山下依子と不倫をしていた。

依子は元レディースである。そして、かなりの美人。

ホテルに行った日、雨が降っていた。

ざああああああああ。

克也は、ある日、遊園地へ行った。隣の部屋に越してきた女子大生と仲良くなり、二人で来ていた。

「楽しいね」

「うん。すごく楽しい」

「今度あれ乗ろうよ」

「いいよ」

「やっぱやめた」

「わがままだね君」

「うざいこと言つと殺すよ」

「生意気言つと、包丁で刺すぞ?」

「あつアイスクリーム屋さんだ」

「おい。話をちゃんと聞け」

その女子大生は、大学で女子サッカーをしていた。なでしこジャパ
ンの影響か。

先日、練習試合の途中、突然雨が降った。

ざああああああああああ。

「あーあ。試合したいな」

「仕方ないよ」

「うるさいなあ。仕方ないとか言わないでよ」

「わがまま言つな。殺すよ」

「おい。お前ら。喧嘩はやめろ」

「はげは引つ込んでろ」

ざああああああああああ。

克也は、その女子大生真奈美の妹、紀子に恋をしてしまった。紀子
はまだ小学六年生である。11歳である。

いけない恋である。犯罪である。しかし、紀子は胸が大きかったの
で、克也の責任ではないと思う。お尻も大きかった。見た目は大学
生だった。

「紀子。つき合おう」

「やだよ。あたし、おっさん、やだもん」

「そう言つなよ」

「お姉ちゃんて我慢しなよ」

「あんなわがままなやつ、やだなあ」

紀子と克也が喫茶店で話をしていると、雨が降った。

ざああああああああああ。

克也は紀子の宿題を見てあげていた。

ざああああああああああ。

「あとでマスターに傘を借りよう」

その頃、ダンサーとしてニューヨークで大活躍していた、節子はかなりブイブイいわせていた。

黒人ダンサー、ジョージと不倫していた。

「ジョージ。あたし幸せだわ」

「オレもだよ。セッコー」

「ああ。すてき」

「ナイスおっぱい」

「もみ方うまいね。ジョージ」

「当たり前さ。五百人もんでるもの」

二人がホテルに行つてた日、雨が降っていた。

ざああああああああああ。

たまたまであったが、ホテルの名前は「レイン」だった。

その後、節子は原因はわからないが自殺した。電車に飛び込んだのだ。

その日、雨が降っていた。

ざああああああああああ。

豆雄は、その頃、趣味と接待を兼ねて、ゴルフをやるようになった。コースを回ってる途中、雨が降った。

ざああああああああああ。

「豆雄くん。今日はもう無理だな」

「そうですね。竹下さん」

ざああああああああああ。

克也は、ある日、バイオレンス系のゲームを部屋でしていた。外では雨が降っていた。

ざああああああああああ。

克也はそろそろ働かないとなあと焦りつつ、多重人格が治らないので、なかなか社会復帰できない。

「くそ。くそ。くそ」

ゲームに熱が入った。

ざああああああああああ。

紀子はすでに中学生になっていた。

ある日、部室で、紀子は先輩たちに強姦された。

「やめて。お願い。いや」

「はははは。はははは。はははは」

「おい。早く代われよ」

「あ。いく」

「いや。いや。いや」

その日、雨が降っていた。

ざああああああああ。

紀子は、廃ビルの屋上から飛び降り自殺した。

克也は、まだ働けない。多重人格がなかなか治らない。

克也が紀子の葬儀に行った時、雨が降っていた。

ざああああああああ。

「紀子……」

棺おけに収まった紀子の死に顔を見る。

「紀子。紀子。紀子」

克也はわんわん泣く。

ざああああああああ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9835u/>

豆田豆雄2011

2011年10月9日18時41分発行